

早期臨床実習を終えて

早期体験実習を終えて

歯学科2年 中 島 努



私たちは今回の早期体験実習で、知的障害者総合援護施設の「ココニーにいがた 白岩の里」と自閉症の方が入居されている「太陽の村」を見学させていただきました。私は今まで知的障害者の方と接したことがなく、今回がはじめての経験でした。見学に行く前は接するのが不安で、少し怖く思っていました。

実際に施設を見学をさせていただいて強く印象に残ったことが二つあります。まず、一つ目は「太陽の村」でのことです。ここでは、見学中にこの施設に入居されているある女性と接する機会がありました。彼女は私を見つけると縄跳びを持って私の元に走ってよってきました。彼女は、どうやら声を失っているらしく、ジェスチャーで「一緒に縄跳びをしよう」といっているようでした。そして縄跳びを一緒にしている最中でも、「今私が跳んだから次はあなたが跳んで！」や「ズボンの紐を縛って！」などいろいろなことを私にジェスチャーを用いて訴えかけてきました。私が彼女の訴え通りに行くと彼女は満面の笑みを浮かべ、すごく楽しそうにしておられ、無邪気にはしゃぐ子供のような様子でした。私は、最初は言葉が伝わらず、どうしていいかわからなかったのですが、彼女の笑顔を見て少しずつ楽しくなってきた、もう今まで持っていた不安は消えていました。そして、見学が終わり、もう帰らなければならない時間になり、私が「ごめんね、もう帰らないといけないんだよ。」と伝えると、その方は急に胸を抑えとても苦しそうにうずくまりました。私は縄跳びで、激しい運動をしてその方の体に何か異常が起きたの

ではないかと思っ不安になり、急いで施設の方に来てもらうとその方は、私に、「この人はさびしくなったりすると、気を引こうとして演技でいつもこうするんだよ。」とおっしゃられました。私は彼女に何事もなくよかったと安心しましたが、彼女に申し訳ないことをしたなと思いました。

二つ目は「ココニーにいがた 白岩の里」でのことです。ここは、児童部、成人部、高齢期更正部、社会復帰部にわかれており、社会復帰部へ見学に行ったときの事です。そこでは、一人の男性と話をする機会がありました。彼は私と同じ年齢で、私に施設での普段の生活や仕事の事、昔は建設業の仕事をしていて、そのときに怪我をしてここに来たということなどいろいろ説明をしてくださった上に、彼は私に彼らがやっている仕事を実際に教えてくれました。接しているうちになんでこんなに障害の程度が軽い人でも、こんな施設で生活をしなければならないのだろうと思ったと同時に、知的障害者をひとくくりにして避けていた自分が急に恥ずかしくなってきました。

この二つの体験を通して強く思っったことがあります。それは、今までの私も含め、何故こういった自閉症や知的障害者の方に対し偏見を持ち、避けている人が多いのだろうかということです。もっとうこういった方々に対しての理解が必要なのではないかと思っました。そのため、こういった偏見をなくすためにも、小学校や中学校、高校などでもこのような施設などを見学できる機会があれば、こういった偏見などもなくなり、障害者の方がもっとう社会に出やすくなるのではないかと思っました。個人的なことを言えば、今回の実習でこのような障害者の方とコミュニケーションをとっていなければ、臨床の場に出ても、どう接すればよいかわからず戸惑っってしまったかも知れませんし、日常生活においても偏見を持ったまま過ごしていただと思っます。そのため今回の実習は私にとっとうても有意義なものとなりました。

この経験を将来に繋げて生きてきたいと思います。

早期体験実習に触れて

歯学科2年 飯田宏美



今回、私たち2年生は自閉症患者の援護施設である「太陽の村」へ体験実習に行ってきました。私は「自閉症」という病気についてはテレビ番組などで知っていましたが、あまり詳しくは知りませんでした。施設内を見学する前に、施設の方がこの施設のことや「自閉症」について丁寧に説明して下さいました。施設の方から、自閉症患者の特徴としては「他人とのコミュニケーションが苦手である」ということを聞きました。誰にでも不得意なことはあり、その中で自閉症患者にとって不得意なことが他人とコミュニケーションをとるといことなのです。しかし、現代社会は他人とのコミュニケーションや情報のやりとりが非常に活発であるため、コミュニケーション能力の低い自閉症患者が「障害者」として見なされてしまうのです。昔、近視の人は漁や狩りにおいて活躍することができなかったため、社会的に低い立場に置かれ、漁や狩りの得意であった自閉症患者が非常に活躍していたということもあったそうです。しかし、現在は近視の人が非常に多いため、眼鏡やコンタクトレンズが世の中に普及し、近視の人は障害者として社会的に低い立場に置かれてはいません。このように、障害者の定義は時代と共に変化していくのです。私はかなりの近視であるので、昔だったら世間から差別されていたのだと想像すると、とても恐ろしくなりました。施設の方からのお話を通して、その時代によって誰でも障害者になりうる、ということが私の心には深く印象に残りました。

施設の方から説明を受けた後、施設内を見学させていただきました。入所者が何かの作品を作製している様子や外では作業を行ったりしていました。ちょうど実習に訪れた日は行っていなかった

ようですが、企業からの依頼された製品を作製することもあるそうです。

次に、入所者のブラッシングの様子を見学させていただきました。入所者の中には自分で歯磨きができない方も多いため、職員の方が工夫してブラッシングを行っていました。職員の方がブラッシングをすると嫌がって暴れたり、口をすすぐことができなかったりする方もおり、職員の方は非常に工夫を凝らしていました。ブラッシングの最中に暴れると危ないので、職員の方は足で入所者の体を抑えていました。男子寮の職員の方は電動歯ブラシを使って磨いており、口をすすぐことのできない方に対しては、口をすすぐ代わりに最後に何度か水を飲ませていました。また、女子寮の職員の方は、最初に研磨剤を付けずに磨いて歯面の汚れを落とし、次に研磨剤を付けて磨き、最後に研磨剤を落としたきれいな歯ブラシで歯面を磨いて口をすすぐ代わりにしていました。また、奥歯の方は小さなブラシを使って磨いていましたが、やはり、奥歯をしっかりと磨くのは難しいようでした。このブラッシング方法にたどり着くまでに何年も試行錯誤を繰り返したとの話を聞き、職員の方の努力に感服しました。この努力のよって、入所者の口腔環境はかなり改善されたそうです。職員の方のブラッシングの様子を見学させていただいた後、引率の先生がブラッシング指導を行いました。先生は2つの歯ブラシを上手く使い、奥歯まで丁寧に磨いており、そのやり方を職員の方に見せて教えていました。やはり、歯科医としての手つきは素晴らしく、いとも簡単に奥歯まで磨いている様子は、感心するばかりで、将来、歯科医を目指す私の目に焼き付きました。

私は今回の実習の前では、実際、将来、歯科医師としてどのようにして障害者を支援していくことができるのか、という問題の答えが思い付きませんでした。しかし、今回の実習を通して、その答えの一部が見つかったような気がします。障害者施設を訪問してブラッシング指導を行うこと、障害者の口腔内環境の改善に努めること、治療において障害者を積極的に受け入れること。しかし、障害者に対してできることはまだまだあると思うので、これからも様々な勉強や実習、実際の患者

様との触れ合いを通して、常に考えていこうと思います。そして、社会に貢献できる歯科医師になりたいと思います。

早期臨床実習を終えて

口腔生命福祉学科2年 上加世田 泰久



今回、私達2年生は、知的障害者総合援護施設「ココニーにいがた 白岩の里」へ体験実習に行かせていただきました。今回の早期臨床実習では、私にとって、全てが初めての体験で

した。正直、前の晩は、知的障害者の方にどの様に接して良いのだろうか、上手くコミュニケーションが取れなかったらどうしようか等、様々な不安が頭の中を駆け巡り大した解決方法も浮かばないまま一睡も出来ませんでした。しかし、後にこれが全くの杞憂であったと気付く事になるうとはその時は夢にも思いませんでした。

「ココニーにいがた 白岩の里」は、児童部、成人部、高齢期更生部、重複更生部、社会復帰部の五つの部に分かれていました。施設の方から、殆んど言葉が話せない事や、力の調節が出来ないため危ない事もあるかもしれない等の説明を受け、不安がより一層募り私は、無事にこの早期臨床実習を終わらせる事が出来るのだろうかと思いました。また、入所者の方は、体は大人、でも心は子供とも説明を受けました。私は、始めその意味が良く分りませんでした。

施設では、まず児童部を見学させていただきました。一見すると大人ではないかと思間違えるくらいの子や、幼い子等、幅広い年齢層の方が生活していってました。私達の姿を見かけると、恥ずかしがって何処かに行ってしまうたり、逆に物珍しそうに近づいて来てくださる方など様々な反応があり、始めは、今置かれている自分の現状を把握するのに多少時間がかかっていました。しかし、徐々に心にも余裕が出来始め、私の緊張や不安も少しずつ無くなっていき、自然と手を握つ

たり、一緒に笑ったり、床に座って毛布で遊んだり自分が思っていたよりも普通に入所者の方と接する事ができました。今まであれだけ悩んでいたのが嘘のようでした。入所者の方は、体は大人、でも心は子供と説明を受けた事を思い出しました。魅力的な笑顔で微笑んで喜んでくれたり、本当に嫌そうな顔をして拒んだり自分の感情をそのまま体全体で表現していました。その事がとても新鮮でした。言葉が上手く話せなくても率直に何の躊躇いもなく喜怒哀楽を体で表して伝えてきました。なるほどこういう意味だったのかとようやく少し分かりました。

次に、社会復帰部を見学させていただきました。生活の中心である社会復帰棟は、部屋も立派な個室で食事はセルフサービスで、当たり前かもしれませんが集団生活の中にも個人の生活がしっかり大切にされていました。社会復帰部の方々は、会話が普通に出来る方もいました。一人の方と同じ仕事を一緒にさせていただきながら、多くのお話をさせていただきました。その方は、詩を書く事が大好きでずっと今まで長い間書き続けていて、今回、詩を投稿したら、見事、今度新潟県知事賞を受賞したと、とても嬉しそうにおっしゃっていました。あまりに嬉しそうに何度も何度もおっしゃるので聞いていた私もとても嬉しくなりました。実習後にその詩を是非詠んでみたくなつたので、調べてみたところ、平成11年11月17日に、新潟ユニゾンプラザで第6回新潟県障害者芸術文化祭「ふくらむアートふあつとにいがたフェスティバル」があり、文芸作品の自由詩部門の表彰及び受賞朗読発表が行なわれたらしく、一緒に仕事をさせていただいた方の写真と詩が掲載されていて思わず、凄いと声を上げてしまいました。詩全体から、喜びと願いが滲み出ていて手に取るようにわかりました。自分の気持ちをそのまま表現できる素晴らしさを改めて感じました。

障害者の施設が一体どのようなものか、ほんの少しだけ分つたような気がしました。今回の実習が全てだとは思いませんしそんなはずは無いと思います。機会があれば、また、是非見学させていただきたいです。その時は今回よりももっと多くのことを学びたいと思いました。今後、歯科・福祉

を学んでいく者として何を学んでいく必要があるかしっかり自分自身の頭で考え、実習で学んだ事を十分生かしながら将来の夢に向かって日々頑張っていこうと思いました。最後になりましたが、このような機会をもうけていただき本当に有難うございました。

早期臨床実習を終えて

口腔生命福祉学科2年 田中陽子



私たちは今回の早期臨床実習で、「コロニーにいがた白岩の里」という知的障害者総合援護施設へ行き、様々な体験をしてきました。

私は中学生の頃に福祉施設のみなさんと触れ合う機会があったので、施設に行くまでは戸惑うことなく実習に臨めると思っていました。ところが行きバスの中で先生からの説明で、ネックレスなどのひっぱれそうな物を身につけている人は外しておいたほうが良いと聞いて、とても不安に感じました。

施設について説明を受けたあと、私は児童部を見学させていただくことになりました。児童部と言っても小学生から高校生までの子がおり、体の小さい子から私より体の大きい子まで、たくさんの子と触れ合うことができました。部屋に入ったばかりの頃はどう接していいのかわからず、ただ挨拶をするだけで、しかも私の表情からは不安が出てしまっていたと思います。施設の方や先生が全身を使い、笑顔で接しているのを見て、私も実際に子どもたちに触れ、笑顔で接してみようと思いました。児童部では2人仲良くなった子がいて、1人は少女、もう1人はまだ6歳くらいの男の子でした。その少女は常に毛布を持っており、それを使ってひとりで遊んでいました。私が近づくと満面の笑みで毛布を私の方に投げってきました。でもどうしたらいいのかわからず、とりあえず毛布を投げ返してみると、声を上げて笑って喜んでく

れているのがわかりました。たったそれだけのことなのに私もすごく嬉しくなって、ずっと毛布を投げあって、時々毛布でくるんであげながら楽しく遊ぶことができました。もう1人の男の子は、私が話しかけても目を合わせてくれず、にこりともしてはくれませんでした。それでも私は男の子の背中をさすったり、手をつないだりしてなんとかコミュニケーションを図ろうとしたのですが、表情にはなんの変化もありませんでした。仲良くなれないのかなと少し諦めそうになったとき、私の両膝の上に立ち、手を強く握り返してくれました。彼の大好きなトーマスのアニメが始まって私の膝から降りようとせずに、そのままの体制でトーマスのアニメを楽しんでくれていました。

私は次に社会復帰部の方々が作業訓練を行っている様子を見学させていただきました。みなさん黙々と作業に打ち込んでおり、もう手馴れている方も多かったです。ネジ締め作業を見学させていただいたのですが、その集計を行っている女性に話しかけてみると、話し方がとてもしつかりしていて、会話がはずんで嬉しかったです。ひとつひとつ丁寧に教え、よそ見もしない様子からその方の仕事に対する責任感を感じることができました。また、ある男性がネジを締めているところへ話しかけてみると、ネジ締め作業をひとつひとつ教えてくださいました。一見簡単そうに見える作業ですが、中には少し複雑なものもあり、うまくできない私に丁寧に教えてくださって嬉しかったです。みなさんがこのような作業から訓練が始まり、いずれは職場体験をして自立へ向かって進んでいるのだなということがわかりました。

これほど近い距離で知的障害者の方々と触れ合うことは初めてで、接すれば接するほど不安はなくなっていきました。振り返ってみると、もっと仲良くなれたのではと思います。今後、歯科衛生士としても、社会福祉士としても知的障害者の方と接する機会があると思います。この貴重な体験を忘れずに、もっと勉強して知識を深めた上で将来私には歯科や福祉の立場から何ができるのか考えていけたらいいなと感じました。